

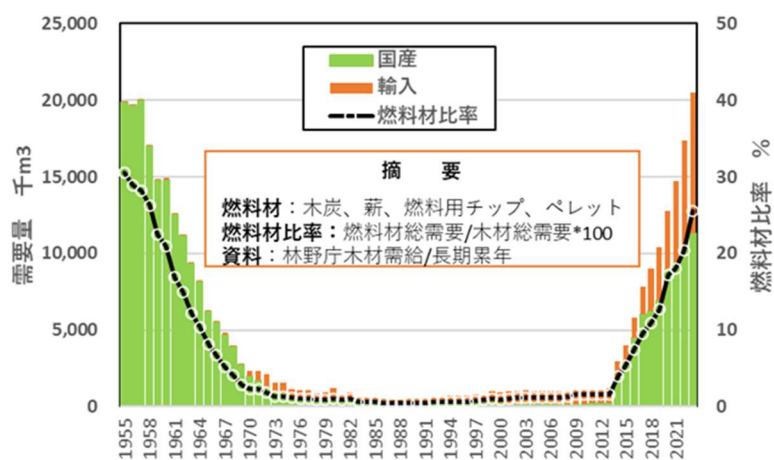
7. 木質バイオマス利活用の実態 (34)

20250606

わが国における薪炭材需要の推移 1 (戦後復興期から高度経済成長期まで)

■戦後復興期 (1945～1950 年代前半)：薪炭材は戦前・戦後を通じて家庭の炊事や暖房といった日常的エネルギーとして不可欠で、さらに製陶、金属加工、食品加工等でも重要な熱エネルギー源でもあった。しかし終戦直後は石炭や石油の不足で深刻なエネルギー危機を迎えており、身近で生産可能な薪炭材への依存度が急増した時期でもあった。また製鉄業においても還元剤として不可欠なコークスの供給が不足し、その代替として木炭が利用され、戦後復旧に重要な役割を果たしたといえる。その後1950年(S25)の朝鮮戦争を契機に政府の統制下ではあるものの石油が輸入され、統制も徐々に緩和されて石炭や薪炭材の石油への転換が始まりだした。

■高度経済成長期 (1950 年代後半～1970 年代前半)：1955 年 (S30 年) 時点でのエネルギー消費構成は、石炭約 75% (鉄鋼・電力・鉄道などの産業用)、石油約 15% (軍需産業関連工業、発電所用など)、薪炭材約 10% (家庭の調理用) であった。その年の薪炭材需要量についてはおよそ 2,000 万 m³ で木材総需要の約 3 割と比較的大きなシェアを有していた (図表 7.42)。しかしその後日本経済の急成長によるエネルギー需要の爆発的増加に対応して 1960 年までに石油の輸入自由化が推進され、1960 年代には石炭が石油に替わって圧倒的主力になる「エネルギー革命」が起こった。薪炭材についてもプロパンガス・都市ガス、石油コンロの普及により 1970 年の需要量は 1950 年の 1/20 以下にまで急減した。以後 1973 年の第一次石油ショックまで、エネルギー構成は変わらないまま日本経済は安定成長を続けた。



図表 7.42 わが国における燃料材需要量の推移

■この時期の薪炭材の原料と調達：薪、木炭ともに広葉樹（ナラ、クヌギ、カシ、クリ）が主体、薪では針葉樹（スギ、ヒノキ、アカマツ）も一部利用された。いずれも国産材で輸入材は皆無に等しい。調達は持続的利用を前提とし、里山での数年周期で伐採可能な萌芽更新（伐採後の株から再生）による管理が基本とされていた。しかし戦後の急激な需要の増加は、一部では持続可能性を無視した伐採も行われた結果、低質の雑木や倒木、若木までも利用され、さらに針葉樹（スギ・ヒノキなど）も大量に薪炭材として供給された。その後のエネルギー革命による薪炭材需要の激減は、里山管理の放棄・荒廃に繋がり、今日に至るまでの農林村社会の経済・文化の衰退や森林の荒廃、生物多様性の喪失、獣害の増加などの環境問題の発生に深刻な影響を及ぼす起点となったといえる。